名寄市病誌　24：18～23, 2016

原著

臨地実習指導の在り方を考える
－名寄市立大学在学生，卒業生からの評価を踏まえて－

Management of Nursing Clinical Practicum － From a Viewpoint of Nursing Students －

長谷部　佳子[1)]，村上　正和[1)]，平野　智美[2)]，森田　静江[2)]
Yoshiko Hasebe [1)], Masakazu Murakami [1)], Tomomi Hirano [2)], Shizue Morita [2)]
岩城　美幸[2)]，廣橋　容子[3)]，岩坂　信子[4)]
Miyuki Iwaki [2)], Youko Hirohashi [3)], Nobuko Iwasaka [4)]

Key Words：臨地実習，臨床指導者，実習体験，人的環境，施設環境

はじめに

名寄市立総合病院看護部は，1994年の名寄短期大学看護学科開設に伴い臨床指導者委員会を設置して，実習指導体制を整備してきた．現在7つの看護師養成機関の実習を受け入れているが，実習指導体制をさらに整備する目的で実習生からの実習評価を得たいと考えていた．同様に，名寄市立大学も開学から20年が経過していることを踏まえ，卒業生や在学生が名寄市立大学の臨地実習をどのように評価しているのかについての調査を実施したいと考えていた．

そこで，病院看護部と大学は臨地実習指導の在り方に関して共同で検討することとして，名寄市立大学の在学生と卒業生に悉皆調査を実施した．本報では，実習生からの実習体験および人的環境，施設環境に対する評価について報告する．

対象・方法

1．調査対象

調査対象者は，名寄市立短期大学部看護学科卒業生597名と名寄市立大学保健福祉学部看護学科卒業生251名，および在校生202名の計1,050名に加え，考察を深める見地から，名寄市立総合病院に勤務する卒後1～3年目で他の看護師養成機関を卒業した看護師28名も調査対象者に含めた．したがって，対象者は総計1,078名になった．

2．調査方法

1）調査票と調査項目

調査票は無記名自記式とし，調査項目は先行研究[1-8)]に記述された臨地実習や臨床指導者に対して抱く実習生の要望を網羅しながら，実習体験は7項目，人的・施設環境は29項目を独自に組み立てた．回答の選択肢は3つずつ設けた．

基本属性については，卒業生の場合は性，年齢，看護基礎教育歴などを尋ねた．在学生の場合は個人が特定されるのを避けるため性，年齢層での回答を促した．

2）調査票の配布と回収

卒業生に対しては郵送法で配布と回収を行った．在学生へは講義・演習の終了後に調査の趣旨を説明の上で調査票を配布し，当日中に回収箱で回収した．名寄市立総合病院の1～3年目看護師に対しては病棟師長が調査票を配布して，回収用封筒を設置して数日留め置き後に回収した．調査は2014年12月に実施した．

3）分析方法

統計ソフトSAS9.3を用いて$\chi 2$検定を行った後，回答の傾向を要約するために，人的環境と施設環境29項目を説明変数にした数量化Ⅱ類による分析を試みた．

4）倫理的配慮

本調査は名寄市立総合病院倫理員会および名寄市立大学倫理委員会の承認（No.14-050）を経て実施した．在学生に対しては，本調査への協力は自由意志が尊重されること，学業成績への影響はないことを口頭と書面で伝えて実施した．病院勤務の1～3年目看護師に対しても同様に，本調査への協力は自由意志が尊重され，協力しないことによる不利益は生じないことを口頭と書面で伝えて協力を依頼した．調査票の回収をもって協力の同意を得たとみなした．

1）名寄市立大学保健福祉学部
Faculty of Health and Welfare Science, Nayoro City University
2）名寄市立総合病院　看護部
Department of Nursing, Nayoro City General Hospital
3）北海道文教大学　人間科学部
Faculty of Human Science, Hokkaido Bunkyo University
4）松蔭大学　看護学部
Faculty of Nursing, Shoin University

結果

1．調査票の回収率

調査票の回収率は表1に示すとおりである．在学生は169名から回収し，卒業生は宛先や住所不明で返送されてきた325名を除く523名中171名（短期大学97名・大学74名）から回収できた．また，名寄市立総合病院勤務の1～3年目看護師（以下1～3年目看護師と略記する）からは21部回収できた．回収率は在学生83.7%，卒業生32.7%，1～3年目看護師75.0%であり，553部の調査票に重大な回答の記入漏れは見られず，有効回答率は100%であった．

2．対象者の概要

対象者の年齢層と男女比は図1に示すとおりである．在学生169名の年齢の平均は20.6±1.3歳，卒業生171名では30.2±5.6歳，1～3年目看護師では25.7±6.4歳であった．

3．臨地実習体験

実習体験に関する評価は図2に示した．どの評価項目でも在学生の肯定率が大学卒業生や短大卒業生に比較して高かった．また，「実習は楽しい体験であった」および「実習は看護の魅力を感じた体験だった」という評価は，在学生間の比較では低学年ほど高かった（P=0.001）．1～3年目看護師と在学生，卒業生との比較では，1～3年目看護師の評価は大学/短大卒業生の評価と極めて類似していた．

表1 調査票の回収率

	合計	在学生 小計	1年生	2年生	3年生	4年生		卒業生 小計	短期大学	大学
在籍数（人）	725*	202	51	52	47	52	在籍数（人）	848	597	251
							宛先不明（人）	325	296	29
回収数（人）	340	169	43	42	36	48	回収数（人）	171	97	74
回収率（%）	46.9	83.7	84.3	80.8	76.6	92.3	回収率（%）	20.2	16.2	29.5
							補整回収率**	32.7	32.2	33.3

＊：在学生小計＋卒業生小計（在籍数－宛先不明者数），＊＊：回収数／（在籍数－宛先不明数）で算出した。

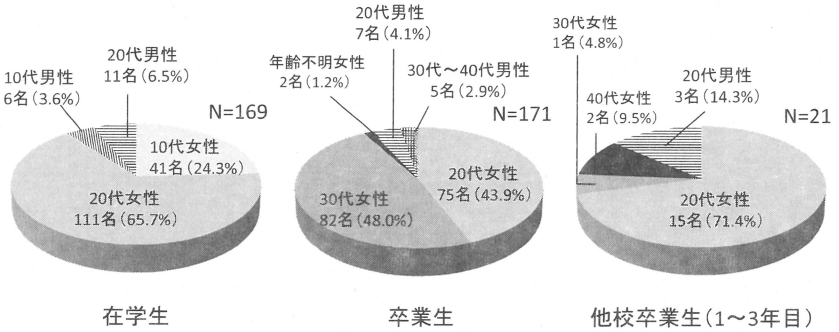

図1 対象者の年齢層と男女比

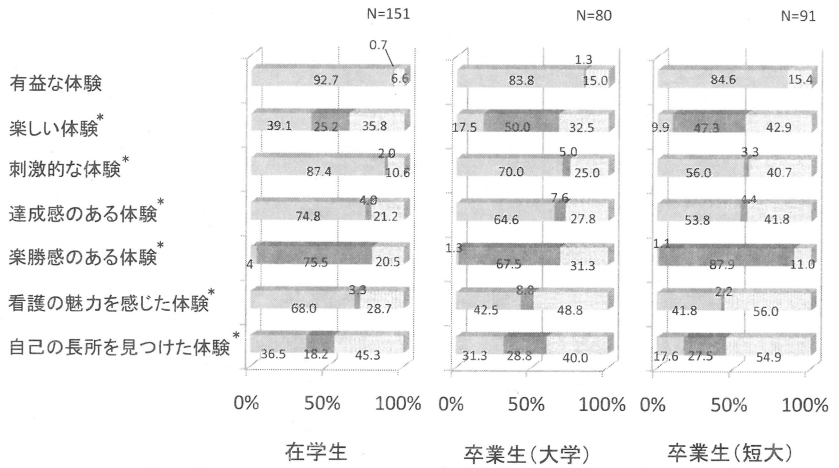

図2 臨地実習体験の評価

凡例は，肯定的な回答，否定的な回答，どちらとも言えない，である．
＊の付く質問項目では，在学生・卒業生（大学・卒業生（短大）の3群間で回答に有意な関連（P<0.01）を認めた．

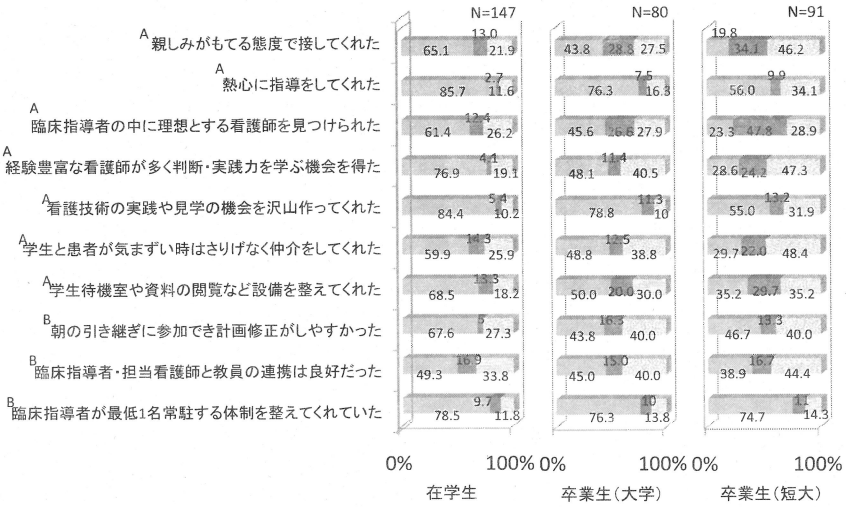

図3―1　臨地実習の人的環境・施設環境に対する評価

凡例は，そう思う，そう思わない，どちらとも言えない，A：在学生に特徴的な回答，B：大学卒業生に特徴的な回答，C：短大卒業生に特徴的な回答である．全ての質問項目で，在学生・卒業生（大学・卒業生（短大）の3群間で回答に有意な関連（P<0.01）を認めた．

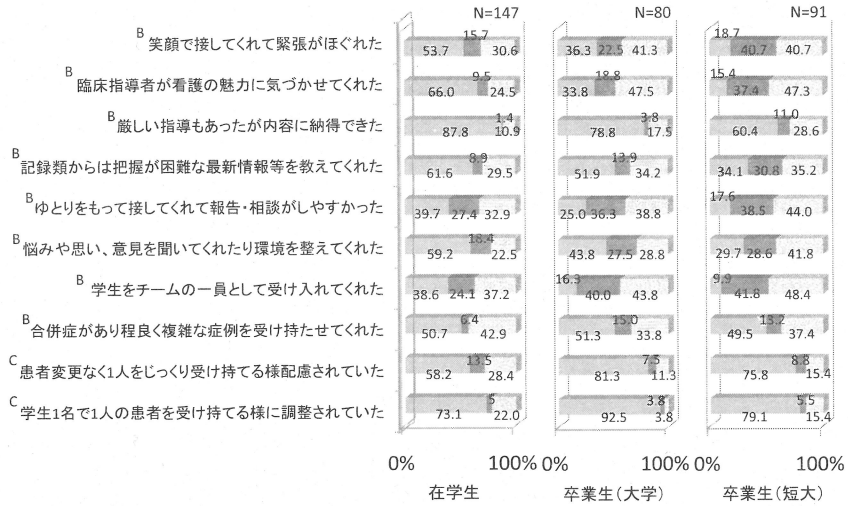

図3―2　臨地実習の人的環境・施設環境に対する評価

凡例は，そう思う，そう思わない，どちらとも言えない，A：在学生に特徴的な回答，B：大学卒業生に特徴的な回答，C：短大卒業生に特徴的な回答である．全ての質問項目で，在学生・卒業生（大学・卒業生（短大）の3群間で回答に有意な関連（P<0.01）を認めた．

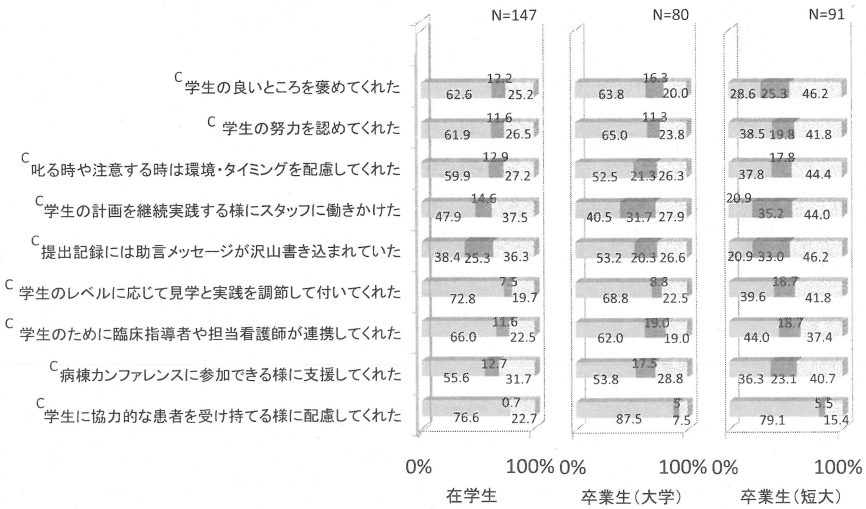

図3―3　臨地実習の人的環境・施設環境に対する評価

凡例は，そう思う，そう思わない，どちらとも言えない，A：在学生に特徴的な回答，B：大学卒業生に特徴的な回答，C：短大卒業生に特徴的な回答である．全ての質問項目で，在学生・卒業生（大学・卒業生（短大）の3群間で回答に有意な関連（P<0.05）を認めた．

4．臨地実習の人的環境・施設環境

人的環境・施設環境に対する評価は図3に示した．在学生，大学卒業生，短大卒業生の3群比較では，全項目で回答に有意な特徴が認められ，在学生の肯定率がほとんどの項目で高かった．従属変数を実習生とした数量化Ⅱ類による分析からは，在学生は，親しみがあり熱心な指導と実践に際しての心配りを臨床指導者から受けることで，理想の看護師像を見出している様子がうかがえた．大学卒業生は，受け身で得られる指導の良さ以上に，厳しくても学生の相談は拒まず，助言を与えてくれる指導者を評価していたものと推察された．短大卒業生では，臨床指導者のみならず，病棟の指導体制やスタッフ間の連携に関しても注意を払っている様子がうかがえた（第1軸の固有値0.5336，累積寄与率71.4%，第2軸の固有値0.213，累積寄与率100%で$p<0.0001$，偏相関係数は省略）．

1～3年目看護師との比較では，「記録類からは把握が困難な最新情報等を教えてくれた」や「提出記録には助言メッセージが沢山書き込まれていた」，「合併症があり程良く複雑な症例を受け持たせてくれた」で肯定率がやや下回っていた．

5．臨地実習体験と人的環境・施設環境との関連

実習体験を従属変数とした数量化Ⅱ類による分析では，「楽しい体験だった」と肯定する要因には，偏相関係数からは「看護技術の実践や見学の機会を沢山作ってくれた」，「学生の努力を認めてくれた」，「学生1名で1人の患者を受け持てる様に調整されていた」，「合併症があり程良く複雑な症例を受け持たせてくれた」，「学生待機室や資料の閲覧など設備を整えてくれた」という評価が大きく影響していた．「達成感のある体験だった」と肯定する要因には「学生に協力的な患者を受け持てる様に配慮してくれた」，「患者変更なく1人をじっくり受け持てる様配慮されていた」，「経験豊富な看護師が多く判断・実践力を学ぶ機会を得た」，「学生待機室や資料の閲覧など設備を整えてくれた」という評価が大きく影響していた．「看護の魅力を感じた体験だった」を肯定する要因には「看護技術の実践や見学の機会を沢山作ってくれた」，「合併症があり程良く複雑な症例を受け持たせてくれた」，「学生に協力的な患者を受け持てる様に配慮してくれた」，「患者変更なく1人をじっくり受け持てる様配慮されていた」，「学生をチームの一員として受け入れてくれた」，「厳しい指導もあったが内容に納得できた」，「ゆとりをもって接してくれて報告・相談がしやすかった」，「悩みや思い，意見を聞いてくれたり，環境を整えてくれた」という評価が大きく影響していた（楽しい体験：第1軸の固有値0.283，累積寄与率74.6%，第2軸の固有値0.096，累積寄与率100%でいずれも$p<0.0001$，偏相関係数は省略．達成感のある体験：第1軸の固有値0.230，累積寄与率73.7%，第2軸の固有値0.082，累積寄与率100%でいずれも$p<0.05$，偏相関係数は省略．看護の魅力：第1軸の固有値0.389，累積寄与率82.8%，第2軸の固有値0.096，累積寄与率100%でいずれも$p<0.0001$，偏相関係数は省略）．

6．自由記述回答

自由記述は，「病棟によって違うが」や「臨床指導者は良いのだが」という但し書きで始まる場合が多く見られた．好意的な内容では「学びの場が提供され達成感や充実感があった（10件中 卒業生[4]）」，「理想の看護師を見つけた（7件中 卒業生6）」，「熱心な指導を受けた（6件中 卒業生2）」，「患者と気まずい時に仲介をしてくれた（卒業生6件）」，「褒めたり努力を認めてくれた（卒業生3件）」，「医師も病態説明などで協力してくれた（卒業生2件）」などが挙がっていた．

否定的な内容では，「笑顔がなく冷たい・厳しい（16件中 卒業生11）」，「学生は邪魔者という印象で居心地が悪い（10件中 卒業生5）」，「思慮に欠ける態度（7件中 卒業生5）」，「報告・相談がしにくかった（4件中 卒業生3）」，「教員と指導者の連携不足（4件中 卒業生1）」，「褒めたり努力を認めてくれなかった（卒業生2件）」などが挙がっていた．

考察

1．名寄市立大学と市立総合病院の実習の概要

考察に先立ち，名寄市立大学と名寄市立総合病院の臨地実習指導体制の概要を説明する．名寄市立大学では，基礎看護学実習Ⅰを1年次の12月，基礎看護学実習Ⅱを2年次の11月に行い，3年次の9月から11月にかけて成人看護学実習Ⅰ・Ⅱと老年看護学実習を行う．そして，4年次の5月から8月にかけて母性・小児・精神・在宅・地域の5領域の看護学実習を行うほか，4年前からは9月に統合実習も加わるようになった．基礎や成人，精神看護学の実習では，1病棟に3～5名の学生と1名の教員を配置して，1名の学生が1人の患者を受け持ち看護展開する形態を採ってきた．ちなみにこの形

態は，首都圏では難しくなっているようである．実習施設に関しては，名寄市立総合病院以外の近隣の医療施設へも学生と教員を配置している．今回，低学年ほど実習体験や人的・施設環境への評価が高い背景には，調査時期が関係したと考える．

一方，名寄市立総合病院の指導体制は，現在は1病棟毎に1名の臨床指導者を常駐させて，学生の支援に当たる方式である．名寄市立大学の臨地実習に関しては，基礎・成人・精神・母性・小児看護学の実習を受け入れてきた．そして，名寄市立大学が短大から大学へ移行するのを契機に，学生にとって楽しく達成感のある実習になることを願って指導体制を刷新した経緯がある．本調査では，この指導体制の刷新による実習生の変化を捉えることを主目的にしていた．

2．調査結果の特徴と今後に向けて

今回の調査結果の特徴は，先行研究[1,3-4,7-8]よりも調査対象者数が多いのみならず，在学生と卒業生の悉皆調査によって幅広く回答者を得たこと，そして回収率も在学生は83.7%と遜色がないことにある．

実習体験については，実習生のほとんどが有益かつ刺激的で，楽しく達成感のある体験であったと肯定していた．楽しい体験と肯定する割合が学年間で有意差を認めたのは，学年が上がるにつれて実習も高度な内容を期待されるため，楽しいという気持ちだけでは締めくくれない感情があるのだと推察される．一方で，在学生，大学卒業生，短大卒業生の順で臨地実習体験や人的環境・施設環境の評価項目に対する肯定率が高かった結果は，臨床指導者委員会による指導体制の改善に向けた取り組みが着実な効果を上げていることを示すものであった．特に，厳しさのある実習だったと回答する割合が在学生や大学卒業生で有意に低く，厳しい指導であっても内容に納得でき，報告・相談がしやすかったという評価は特筆に値する．さらに，今回の調査結果からは，実習での楽しさや達成感が看護の魅力を感じる体験につながることがわかった．努力を認めてくれたと感じることが楽しみや喜びにつながることは，治田ら[9]の複数教育機関での調査結果とも一致した所見であった．我々の既報[10]からは，学生は指導者への報告・相談のタイミングに苦慮して失敗感を感じる場合が多いことが明らかになっているため，彼らなりの気遣いを認める言語的，非言語的な関わりを行うと学生の励みになるのではないだろうか．

名寄市立総合病院の実習指導体制には多くの強みがあることが明らかになったが，改善の余地がある内容にも目を向けなくてはならない．1つめには，大学と病院の連携をより強化する必要がある．教員と臨床指導者の連携が不十分であることは，多くの先行研究[5]で指摘されているが，カンファレンスや朝・夕の行動調整以外にもコミュニケーションを図るように，双方が意識する必要があるだろう．また，病院／大学という組織ではなく，看護職としての連帯を意識した取り組みを検討すると良いのではないだろうか．取り組み次第では臨床指導者と教員間の情報共有が促進されるため，学生への情報提供も多くなると期待される．2つめは受け持ち患者選定に関する検討である．他施設卒業生の方が，程良く複雑な症例を受け持たせてくれたと肯定する割合が高かったが，どの程度の合併症やADLを適切と考えているのかまでは今回の調査では明らかにできていない．したがって，継続調査を行いながら技術実践が可能な対象者のレベルを，臨床指導者と教員で精選する必要がある．

おわりに

本調査の限界は，在校生や卒業生の過去の記憶を利用した部分があることに加えて，体験した全ての実習の総合評価であるため，楽しさや達成感に関連する要因がやや正確ではない可能性をはらむことにある．しかし，名寄市立総合病院の臨地実習指導体制に対する人的・施設環境の評価が経年的に着実に改善され，実習生の満足度が高くなっていることは確認できた．この好評価が維持できるように，病院側と大学側で連携を意識しながらさらに努力していきたい．

謝　辞

今回の調査にご協力頂き貴重な意見を寄せて下さった卒業生および在学生の皆様に心から感謝申し上げます．皆様の益々のご活躍を祈念致します．

付　記

本研究は平成26年度名寄市立大学道北地域研究所の「課題研究」助成による調査の一部である．

引　用　文　献

1)秋山智，佐藤一美：臨地実習指導に問われるもの；学生の経験からみた臨床指導者の様相；「情意」という側面からの考察．看護教育 46：110-115，2005.

2)伊藤良子，山田豊子，安斎三枝子，ほか：臨地実習指導における看護師役割意識調査について（第2報）―若年者群と非若年者群間の「役割意識」と「実行度」の比較．京都市立看護短期大学紀要　30：111-120，2005.
3)岡崎千賀子，香野美香，今川美由紀，ほか：臨地実習指導のあり方を考える―学生からの他者評価表を用いて今後の課題の検討―．日本看護学会論文集：看護教育　38：66-68，2008.
4)岡崎千賀子，鈴木美香，今川美由紀，ほか：ここがおかしい！臨地実習；受け入れ施設の視点；臨地実習充実への提案～学生からの他者評価表を活用して～，HANDS-ON　4：30-34，2009.
5)松本恭子，萩原一美：学生が望む学習者支援．医療　63：637-640，2009.
6)濱松恵子，藤堂由里，影本妙子：実習時間数の減少に伴う看護学生の実習指導評価―成人看護学実習（慢性期・終末期）への影響―．川崎市立看護短期大学紀要　32：15-20，2012.
7)九津見雅美，冨澤理恵，新井祐恵，ほか：A病院でのB大学看護学臨地実習における実習指導役割実施状況に関する調査―実習指導者・看護学教員の自己評価と看護学生の満足度から―．千里金蘭大学紀要　9：119-127，2012.
8)浅見多紀子，久保かほる，鈴木妙，ほか：複数患者受け持ち実習の方法と指導に対する学生の満足度と担当看護師の自己評価．日本看護学会論文集：看護教育　43：78-81，2013.
9)治田祐子，米田恭子，内田有香，ほか：臨地実習における看護師の役割とその実態．日本看護学会論文集：看護教育，43：118-121，2013.
10)長谷部佳子，村上正和，廣橋容子，森田静江，平野智美，岩城美幸，岩坂信子：名寄市立大学／短期大学看護学科卒業生と在学生による看護教育の評価．名寄市立大学道北地域研究所年報 地域と住民　33：21-32，2015.